

タレント・格闘家

# ボビー・オロゴンさん

タレントとして、プロ格闘家として、お茶の間を賑わせてきたボビー・オロゴンさん。日本人と結婚され、現在4人の子を持つ父でもあります。ボビーさんの愛情とユーモアに溢れた人柄は、多くの人を魅了し続けています。ウィットに富んだジョークの数々に、聞き手も笑いが絶えませんでした。

(聞き手・構成：伊藤 敬史、岩崎孝太郎、佐藤 顕子)



— ボビーさんはナイジェリアのご出身ということですが、子どものころはどのような思い出がありますか。

子どもがいっぱいいたおかげで、楽しかったですね。

— ご兄弟がたくさんいらっしゃったんですね。

そうですね、34人いました。

— 34人！

最近のうわさによると、お父さんに7番目の彼女ができたところなので、なかなか楽しく生きているのではないかなと思いますね。

— ナイジェリアは一夫多妻制なのですね。兄弟の仲はよかったですか。

もちろん。みんな本当に家族という感じですね。

— お母さんの異なる兄弟の間でのあつれきはないのですか。

ないですね。基本的に、お母さんはみんなのお母さんというイメージなんです。うちのお母さんが2番目のお母さんの子どもにおっぱいをあげたりしていたぐらいだったので。

— 家族の絆が強いんですね。子どものときは、どのような夢をお持ちでしたか。

大きいお肉をいっぱい食べたかったです。向こうの子どもはだいたい同じお皿で食べるので、早い者勝ちで、4つ上のお兄さんに全部先に取られるときがありましたから。

— どうして日本に来ようと思ったのですか。

お父さんが貿易会社をやっていて、日本と貿易をしていました。それで帰ってくるたびに日本人の優しさとかをいっぱい教えてくれたので、大人になったら1回行きたいなと思っていました。

— 日本人は優しいイメージだったのですか。

はい。海外の商売というのは、やっぱり不安なんです。でも、日本人との間だけは心配いらない、すべて約束通りにしてくれる、と教えられました。

— ナイジェリアのような英語圏の国の人には、日本は、言葉の壁があるのではないですか。

確かに英語は通じなかったですけど、心は通じた気がしましたね。いい心があれば、言葉の壁って、

怖くないんですよ。本当に言いたいことは、ジェスチャーでも分かってくれました。

— 実際に日本に来てみて、元々の印象と違ったりはしませんでしたか。

来るときはサムライがいるかなと思ったけど、実際にはいなかった（笑）。でも日本男子はやっぱりサムライでしょう。それは日本に来てあらためて感じました。

— 例えば、どういうときにそう感じますか。

六本木のスナックに行くと、男子はサムライになるとか…（笑）。そういうことじゃない？ やっぱり、ビシッと決まっている通りにするところです。その部分はすごく気持ちよくて、やりやすいなと思います。

— 日本以外にも、いろいろな国にいらしたんですね。

お父さんの貿易で、ドイツやイギリスにも行きました。

— その中で、日本の最大の魅力は何だと思えますか。

決まったことが、明日になってもずれないところで。それは本当に誇りに思いますね。ちょうど先週アメリカにロケに行きましたが、日本で話したことが、向こうに着いたとき、360度変えられたりしました。360度？

— 180度ですね。1回転しちゃいましたね、360度…。

1回転は何百度？

— 360度ですね。

400度ぐらいにしようか（笑）。アメリカでは本当に変わってしまっただ変だったんですけど、そういう小さいことで、あらためて日本は素晴らしいなと思いました。

— 日本に定住することになったわけですが、食べ物とか、宗教的なものとか、文化とか、全然違ったのではないですか。

文化の壁は高いとみんな言うけど、自分の中ではみんな一緒じゃないかなと感じるところがあります。特にアフリカの場合は、日本が大切にしているものは、アフリカにもあったりするんですよ。例えば「向こう三軒両隣」というのは、アフリカが一番大切にしているものだったりします。だから、日本のおじいさんとしゃべると、自分のふるさとを思い出したりするんですよ。

今までにいろいろな年配の方に、日本のことをいろいろ教えてもらいましたが、それが自分のふるさとにぴったり合うような考え方だったりします。だから、若い人も、年配の方を見習ってほしいなと思いますね。

— 逆に、日本に来て、ここはよくないと思うことはありますか。

よくないと感じたことはないのですが、こうなったら僕にとってもっと分かりやすいなというのはあります。

— 例えばどういうことですか。

例えば、「これ飲みますか？」と聞かれて「はい、大丈夫です」と言うのは、どっちか分からないときがある。要らないときも、「大丈夫です」と言うでしょう。

— 確かにそうですね。

最初は、どっちか分かりませんでした。だんだん、基本的には、NOではないんだなということが分かってきました。その後は、埒があかないと思ったら、YESが正解だと思うようになりました。

— ああ、そうかもしれないですね。

YESが正解。NOはない文化って素晴らしいなと、今になってやっと感じるようになりました。

— そういうところは日本語って分かりにくいですね。

そう。NOもYES、YESもYESの言葉って世界のどこにもないんですよ。慣れれば分かりやすいんですけど、やっぱり慣れるまではちょっと戸惑いました。

— さっきエレベーターの中でお子さんと会いましたけど、かわいいですね。

ありがとうございます。

— おいくつですか。

一番上は12歳、一番下が3歳で、4人の子どもがいます。

— お子さんとはどんなことをして遊びますか。

鬼ごっこだったり、かくれんぼだったり、プールで泳いだり。お父さんの威厳を見せながら…、効かないけど。

— ポビーさんの母国のナイジェリアは一夫多妻制ですが、日本は一夫一妻制で、1人しか奥様を選べません。抵抗はないですか。

抵抗はあるんですけど、そういうようなことをしそようになったら、うちの奥さんに言われるんですよ、ここはナイジェリアじゃねえからって（笑）。それであらためて、そういえばここは日本だったという感じで小さくなるんです。

— 奥様とはどういうところで知り合われたのですか。

東京のバーです。最初は結婚しようと思っていたのですが、2週間会ったときに、一緒に住みたいと言われて、一緒に住みました。ただ、その時は日本でいろいろうまくいなくて、ナイジェリアに帰ると言ったんです。そうしたら、奥さんが一緒に行くと言ったので、向こうに1年ぐらい住んで、向こうで結婚しました。

— ナイジェリアで結婚したんですか。

はい。向こうでは、停電になったり、いろいろ不便なことがあるわけですよ。それでも耐え抜いたから、もしかしてこの人が僕の奥さんなのかなと思って結婚しました。それで、子どもができたときに、日本で産みたいと言って、日本に帰ってきました。

— その後、ポビーさんは、日本に帰化したのですよね。

はい。日本人として頑張っていきたいと思います。

— 日本国籍を取るか、ナイジェリア国籍のまま生きていくかというのは、悩みませんでしたか。

最初は悩みました。だけど、一番切なかったのは、ナイジェリアに行ったら、空港で外国人とナイジェリア人が別々に並ぶわけですよ。日本に帰ってきても、外国人と日本人は別。だったら家族と一緒にの国籍にと思いました。そうじゃないとちょっと寂しいと思う。やっぱり子どもたちの将来のことも考えると、日本国籍を取った方がいいなと思いましたね。

— ナイジェリアのご家族の反対はありましたか。

もちろんありましたけど、家族はみんな自分の人生を生きています。そう考えると、マイライフが自分にとって一番大切にしなければいけないものだなと思いました。やっぱり日本人になれてよかったなと思います。すごく感謝です。

— うれしい言葉ですね。

他に何もいらなかった。受け入れてくれた感謝は本当に一生忘れないと思いますね。日本国籍になるのも楽しじゃなかったし、実際、帰化申請しても認められない人も山ほどいますから。

— 帰化申請してから認められるまで、どのくらい時間がかかったのですか。

1年半です。

日本人との間だけは心配いらない、すべて約束通りにしてくれる、と教えられました。確かに英語は通じなかったですけど、心は通じた気がしましたね。いい心があれば、言葉の壁って、怖くないんですよ。

ボビー・オロゴン



— やっぱり厳しいですね。

いろいろな面接をして、いろいろな文書を書きました。だけど、帰化した後、海外に行くと、空港で止められて、お前は日本人のわけないだろうと言われます（笑）。この前フィリピンに行ったときは、どうやって日本人になれたのと聞かれました。「俺は日本人になるために生まれたんだ」と言っちゃったよ（笑）。

— ボビーさんは、テレビに出てきた当時は日本語がとても面白いといえますか…。

今は面白くないと（笑）？

— いや、今も面白いですけど（笑）。

まず自分が楽しくなきゃだめなんです。小さいころから自分の中で楽しく生きてきて、周りもみんな一緒に楽しめればいいと思っていました。わざと狙っているんですとか聞かれますが、わざと狙う必要はないんですよ。

独特の話し方というのも、自分の中では普通だったんですよ。11～12年前は、今の4～5割しか日本語が分かりませんでした。でも、その5割のキャパシティの中で言いたいことは全部言うのがメインポイントだったので、恥ずかしがるというよりは、聞いたものはすぐ口にしたタイプでした。

— 今日はもう完璧な日本語ですね。

まじめすぎてだめ？

— そんなことないです（笑）。ただ、先ほどから難しい言葉をよく使っているらしいと…。

弁護士と聞いたから、まじめに答えた方がいいのかと（笑）。ああ、また事務所で怒られる（笑）。

— テレビに出るようになったのは、どういうきっかけがあったんですか。

テレビは、本当に狙ってなかったんです。たまたま町を歩いていてインタビューされて、それがTBSのプロデューサーに気に入られ、レギュラーでやろうじゃないかと言われてやってみたら、さんまさんに気に入られました。まあ、運がよかっただけかもしれない。

— テレビに出るようになって、町を歩いていても声を掛けられたりしますか。

「ボビーだ」と言う人はいます。「ボビーだけど、何かあったのか？」と思います（笑）。巣鴨に行ったら「サンコンだ」と言われます。

—間違えて（笑）。

まあ、サンコンならまだマシだけど、クロマティと

か（笑）。一番ひどかったのは、セイン・カミュと言われたので、えっ？と（笑）。でも、それもありがたいことで、前向きに頑張っていきたいなと思います。

—— 格闘技まで始められたというのはすごいですね。バラエティーとは全然違うことで、大きな挑戦だったのではないですか。

そうですね。人間はできないものはないなと思います。やるからには100%しっかりやるというのが、自分の小さいころからの生き方だったので、格闘技であろうが何であろうが、チャレンジに関して恐れないうようにと思いますね。

—— もともと格闘技には興味はあったんですか。

なかったんです。やったことがない。小さいころもけんかしなかったです。

—— 体は鍛えていたんですか。

鍛えてないです。

—— プロとやるわけですから、極端な話、大けがをして一生体が使いものにならなくなるかもしれないという不安は大きかったのではないですか。あえてリスクを取りに行ったわけですよね。

ばかなんですよ。普通はできない。

—— できないと思いますよ。

だけど、自分の中ではシャッターがあるんですよ。そのシャッターを閉じたら、もう、何にも失うものなくなる。学校のときもそうでした。

—— 学校ですか。

大して勉強好きではなかった。あまり勉強しないけど、集中してちょっとしたら、ぎりぎり合格するタイプ。まあ、よく言えば要領がいい。

—— 本当に日本語の言い回しをよくご存じでいらっしゃいますね。

弁護士の方々はもっと頭がいいだろう（笑）。

—— 「もしも8歳のこどもが大統領に選ばれたら」（加納眞士著 ポビー・オロゴン画 ポプラ社）という本に、ポビーさんの挿絵がありますが、この絵（表紙裏「ギャラリー」にカラー写真掲載）は素晴らしいですね。

ティンガティンガとってアフリカの独特の絵なんですよ。ペンキで描くんです。

—— 色がとても鮮やかですね。絵はもともと描いていたんですか。

いや、あまり描いてなかったんですよ。でも、自分が集中すれば集中するほど、夢をかなえられると思っちゃうんですね。3～4時間ぐらい上手な先生に教えられて、それで描いてみたら出来上がりはこうなりました。

まあ、人生を100%で生きて、生きているうちに夢を失ってはいけないなと思って。死んだらいっぱい寝られるから。「in my dream」がベストじゃないかなと思います。

—— これからの夢はありますか。

他人の人生を生きたくない。自分が前向きに自信を持って頑張るって生きること。すべてマイライフで生きていきたいなと思います。夢だと思っていることはすべてかなえるつもりで、楽しく、陽気に生きていきたいなと思います。

#### プロフィール ぼびー・おろごん

1973年、ナイジェリア連邦共和国生まれ。2001年から日本でタレント活動を開始し、テレビのバラエティー番組に多数出演。2004年には格闘家としてデビューし、K1、キックボクシングなどを歴戦する。2007年には日本国籍を取得（日本名は、近田ポビー）。ナイジェリア語以外に英語、日本語も堪能で、特技は、格闘技のほか、乗馬、サッカー、柔道。ドラマ、映画、CMなどでも幅広く活躍中。